

対面とオンラインを併用して小中学生の教育支援を行う大学生の認識の変化

A Study on Changing Recognition of University Students who provide Educational Support to Elementary and Junior High School Students using both Face-to-Face and Online Methods

浦 唯^{*1}, 稲田 優輝^{*2}, 北澤 武^{*2}
Yui URA^{*1}, Yuki INADA^{*2}, Takeshi KITAZAWA^{*2}

^{*1} 東京学芸大学教育学部

^{*1} Faculty of Education, Tokyo Gakugei University

^{*2} 東京学芸大学大学院教育学研究科

^{*2} Graduate School of Teacher Education, Tokyo Gakugei University

Email: e195203x@st.u-gakugei.ac.jp

あらまし：本研究では、子ども食堂を訪れる小中学生に対して、対面とオンラインを併用して教育支援を行う大学生の認識の変化について、「教育支援のイメージ」、「支援対象となる児童生徒のイメージ」、「児童生徒への対応」の3つの観点に着目し、自由記述による対応分析で追究した。その結果、教育支援前の大学生の各イメージは、自身の経験や大学での学びで得た知識をもとに語っていた。しかし、教育支援後には、小中学生の状況を明確に理解し、具体的な教育支援の在り方について述べていることが分かった。

キーワード：教育支援、大学生、子ども食堂、対面、オンライン

1. はじめに

子どもを取り巻く課題は、社会や家庭の変化により複雑化・多様化している⁽¹⁾。ボランティアで子どもと直接関わった大学生は、子どもへの理解、対応や関わり方に変化が生じる⁽²⁾。だが、COVID-19の影響もあり、対面とオンラインを併用した教育支援が求められる。この支援の方法で大学生の認識にどのような変化が生じるかを明らかにすることは、今後の支援の在り方に示唆を与える点で重要と考える。

そこで本研究では、オンラインと対面を併用して、大学生が小中学生の教育支援を行う。そして、教育支援に対する大学生の認識の変化を、教育支援の前後の自由記述から明らかにすることを目的とする。

2. 概要

2.1 対象

事前調査：沖縄県の学生（対面）が6名、都内の学生（オンライン）が12名の計18名。

事後調査：沖縄県の学生が6名、都内の学生が9名の計15名。

2.2 期間

小中学生への教育支援は2021年7月9日～12月24日の期間に合計19回行った。後述の「教育支援に関する自由記述」は、事前調査を2021年6月13日～8月13日、事後調査を2021年12月25日～1月6日の間にWebにて記述を求めた。

2.3 活動内容

沖縄県A市の子ども食堂を訪れる小中学生を対象に、上述した期間において、毎週金曜日の16:30～17:30に各教科の学習支援を、17:30～18:30に調理や工作などの活動を行った。具体的なオンラインによる教育支援の在り方として、各教科の学習支援では小中学生の質問に答えたり、計算の習熟を図ったりした。調理や工作は、同じテーマに取り組み、ビデオや音声を通して交流を深めた。

3. 分析方法

教育支援に関する自由記述は、「教育支援のイメージ」、「支援対象となる児童生徒のイメージ」、「支援対象となる児童生徒への対応」の3つの観点で求めた⁽²⁾。各回答結果は、教育支援の事前と事後の特徴を分析するために、最小出現数を2、最小文書数を1とする対応分析をKH Coder 3で行った。

4. 結果と考察

4.1 「教育支援のイメージ」に関する自由記述

図1は「教育支援のイメージ」の対応分析の結果を示す。対応分析の結果、「機会」「学習」「関係」の用語が、事前の特徴語として抽出された。自由記述を見てみると、「教員でも親でも友達でもない斜めの関係の構築」「勉強の機会や場を提供」の記述が認められた。これらから、事前では、教育支援のイメージを教育支援の目的である関係の構築や勉強の機会の提供と捉えている大学生の存在が明らかになった。

事後の特徴語として、「成長」「将来」が抽出された。例えば「児童生徒の将来に何か良い影響があるならそれは教育支援になる」の自由記述が得られ、小中学生の成長や将来に目を向けている大学生の存在が明らかになった。これらの知見から、教育支援を体験で、「教育支援のイメージ」が教育支援の目的から小中学生の将来を意識した捉え方に変化することが期待できる。

4.2 「支援対象となる児童生徒のイメージ」に関する自由記述

図2は「支援対象となる児童生徒のイメージ」の対応分析の結果を示す。事前の特徴語として「貧困」「困難」などが抽出された。自由記述を見てみると「経済的理由により学習困難を抱えている児童生徒」の記述が認められた。このことから、事前では子ども食堂を訪れる貧困を抱えた小中学生のイメージを回答する者が存在することが分かった。

事後の特徴語として「活動」「苦手」などが抽出

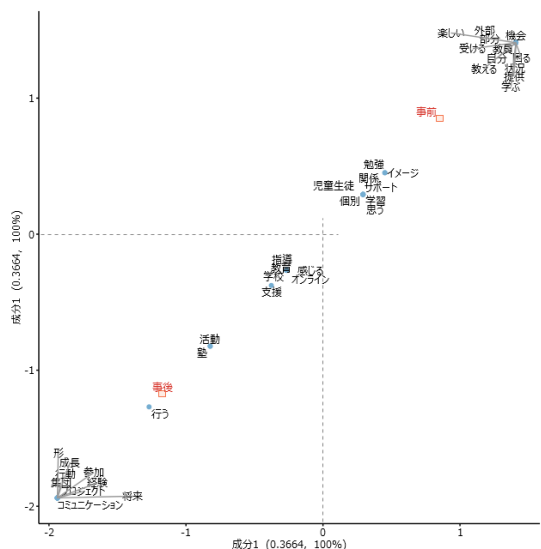


図1 対応分析の結果（教育支援のイメージ）

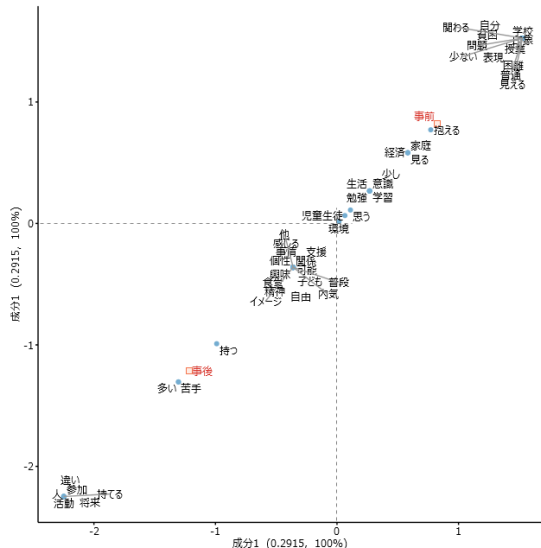


図2 対応分析の結果（支援対象となる児童生徒のイメージ）

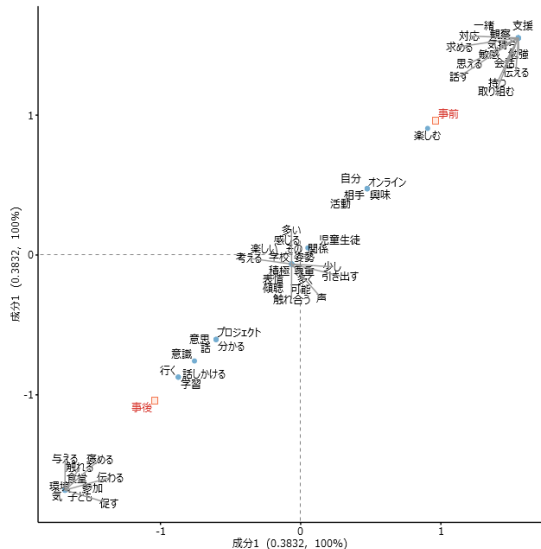


図3 対応分析の結果（支援対象となる児童生徒への対応）

された。自由記述には「苦手意識やネガティブなイメージを持つ児童生徒が多い」の記述が認められた。この知見から、対面とオンラインのどちらであっても、教育支援を体験すれば、支援対象のイメージが具体的にすることが考えられる。

4.3 「支援対象となる児童生徒への対応」に関する自由記述

図3は「対象となる児童生徒への対応」の対応分析の結果を示す。事前の特徴語として「取り組む」「楽しむ」が抽出された。自由記述では「一緒に楽しむという気持ちをもって取り組む」の記述が認められた。したがって事前では、教育支援を通して小中学生とかかわりを深めようと考えている者が存在することが分かった。

一方、事後の特徴語として「促す」「話しかける」が抽出された。自由記述を見てみると「可能な限り多くの学習環境に参加させるよう促すこと」「1人ずつまらなそうにしている児童生徒には話しかける」の記述が認められ、小中学生に対して参加を促す者が存在することが分かった。この知見から、教育支援を体験することによって、支援対象の実態を把握して、個に応じた働きかけをする変化が期待できる。

5. まとめ

本研究は、子ども食堂を訪れる小中学生に対して、大学生が対面とオンラインで教育支援を行い、前後の変化を分析した。結果、「教育支援のイメージ」は、教育支援の目的である関係の構築や勉強の機会の提供と捉えていたが、事後では、支援対象である小中学生の今後の姿や成長を含んだものへと変化が認められた。支援対象となる「児童生徒のイメージ」について、事前では子ども食堂を訪れる小中学生に対して抱くイメージを記述していたが、事後では教育支援を通して得られたイメージが具体的なものとなった。「支援対象となる児童生徒への対応」について、事前では小中学生とかかわりを深めようと考えていたが、事後では支援対象の実態を把握し、個に応じた働きかけを行う変化が期待できた。

今後、対面とオンラインによる教育支援の差異について追究することが課題である。具体的には、小中学生のニーズに対する大学生の理解度や教育支援の振る舞い方が挙げられる。オンラインによる教育支援の工夫や在り方を検討することが求められる。

謝辞

本研究は東京学芸大学「経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト」の支援を得た。

参考文献

- (1) 文部科学省: “チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について”, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf (参照日2022.1.18) (2015)
- (2) 竹内美智, 山本真由美: “学習支援ボランティア学生との違い”, 大学教育研究ジャーナル, 14, pp.37-49 (2017)